

3. 平成5年度に発生した注意すべき病害虫

北海道害虫防除所

1. はじめに

北海道病害虫防除所、各道立農試、道農業改良課および北農試等で実施した発生予察事業並びに試験研究の結果から平成5年の主要病害虫の発生状況、新発生病害虫および平成6年度に特に注意すべき病害虫について報告する。

2. 平成5年度に多発生した病害虫

平成5年度の病害虫の発生状況の中からやや多〜多発した病害虫を表1にまとめた。昨年は夏期が冷涼な気候であったことから、害虫は全般的に発生が少なく推移したが、病害では低温性病害の発生が多かったことが特徴である。

3. 平成6年度に特に注意すべき病害虫

1) 水稻の葉しょう褐変病

平成5年度の発生は道内の主要稲作地帯で広範囲に多発し、発生面積も水稻作付の約46.2%と昨年より多かった。

昨年は7月下旬から8月中旬の穂ばらみ期以降が全道的に長期にわたる異常低温となったことから発病に好適条件となり、感染期間が長びいたことが多発に結びついたと考えられる。

したがって、本病の発病防止に有効とされる珪酸石灰の適正な施用、出穂のぼらつきを防止するための適正な水管理と施肥管理、感染期である止葉抽出始から出穂期にかけての適期防除などに心掛けることが重要である。

2) 小麦のうどんこ病

平成5年の発生面積率は小麦作付の71.3%(平成50.0%)、被害面積率18.8%(平成8.0%)と近年にない多発となった。

昨年は小麦の生育が大幅に遅れ、感染期間が長びいたことに加え、6月下旬からの少雨傾向が、胞子形成および飛散に好適条件となったことが発病を増大させた。

秋季の発生も多めに推移していることから、菌密度も高いと考えられる。春季には早期発見に努め、薬剤防除は早めの実施を心掛ける。なお、本病に対し一部地域で植物体内への浸透移行性にすぐれ、効果が高い特効薬であるDMI(EBI)剤の感受性低下が認められているので、他病害を含め防除基準に準拠して薬剤を選択する必要がある。

3) 馬鈴しょの黒あざ病

平成5年の発生は広域的で発生面積率は馬鈴しょ作付の45.1%、被害面積率も8.7%と近年にない多発となった。このことは5月下旬〜6月上旬に全道的な低温、多雨となったため、発病に好適し萌芽期の遅延で感染期間が長びいたことが大きな要因と考えられる。また、昨年の多発生と収穫の遅れから種いもの保菌率も高いと予想される。

従って、使用する種いもの厳選や、種いもの消毒は必ず実施するなどの対策が必要である。また、催芽の促進や、早植えおよび深植えは避けるなど、萌芽期間の短縮に心掛けることが重要である。

4) たまねぎのボトリチス菌による貯蔵腐敗

平成5年、たまねぎの主要産地で収穫後の仮貯蔵および本貯蔵中にボトリチス菌による腐敗が多発した。北海道では、従来、灰色腐敗病菌Botrytis allii、菌糸性腐敗病菌Botrytis byssoideaが優占して発生しており、昨年の菌種は、現在調査中である。感染部位は主として球の首部の乾燥が不十分な時に多発する傾向があり、昨年は倒伏期の大幅な遅れや、収穫後の天候が不順傾向であったことが感染に好適したと考えられる。

したがって、収穫前には本病に対する薬剤散布を防除基準に準拠して励行することが必要であり、収穫後も予備乾燥や厳選して貯蔵するなどの対策を行うことが大切である。

5) 馬鈴しょのジャガイモシストセンチュウ

平成5年8月、新たに根茎管内別海町の馬鈴しょ畑でも発見された。発生地域の拡大とともに発生面積の漸増傾向を示している。

線虫密度を長期間高めない対策として、4年輪作、線虫密度に応じた馬鈴しょの栽培、殺線虫剤処理を組み合わせた総合的防除対策が指導されるなど、近年発生は目立たなくなっている。このため、本線虫に対する警戒心が薄れてきている傾向がみられる。本線虫は寄主作物がなくても10年以上生存でき、極低密度の圃場に感受性馬鈴しょを栽培すると急激に密度が高まる性格がある。

従って、発生地域では長期の輪作や、密度低減効果の高い抵抗性品種の積極的な導入が必要である。

また、未発生地域においては、伝搬防止のため、正規の種いもの使用や、発生地域からの球根、苗木、土壌などの移動は避ける必要がある。また、発生地域から未発生地域への出作を行う場合には農機具等の洗浄を十分に行うなど伝播防止に努めるほか、侵入した場合に線虫の増殖を防ぐためできるだけ長期の輪作を心掛けることが大切である。

4. 新たに発生または命名された病害虫

平成5年度に新たに発生または命名された病害虫は21件と多く、その概要を表2に示した。本年は侵入害虫であるキンケクチプトゾウムシの道内における発生が確認されるなど重要病害虫の新発生が多かった。

表1 平成5年度に多発生した病害虫

作目	やや多～多発した病害虫名
水稲	葉しょう褐変病、褐変穂、にせいもち病、イヌヅグムシ
小麦	うどんこ病、アブラムシ類
大豆	菌核病、べと病、わい化病
小豆	輪紋病、灰色かび病、茎疫病、落葉病、炭そ病
菜豆	灰色かび病、根腐病
馬鈴しょ	黒あざ病、そうか病
てん菜	西部萎黄病、ヨウガ（第1回発生）
野菜類	夕紅の白斑葉枯病、サトウの黒斑病、ダイコンの黒斑細菌病、キャベツのべと病、ハクサイの軟腐病 トマトの灰色かび病、サトウの病、トウモロコシのべと病、黒星病、菌核病、斑点細菌病、ダイコン・キャベツのヨウガ

表2 新たに発生または命名された病害虫

作目	病害虫名	病原菌・害虫の学名	病徴・加害
トウモロコシ	すじ萎縮病	Rice black-streaked dwarf virus	株全体の萎縮
ジャガイモ	半身萎ちょう病 (新病原菌)	Verticillium dahliae	下位葉の黄化、株の片側あるいは全体の萎ちょう
タマネギ	黄斑病	Cladosporium allii-cepae	葉身の紡錘形病斑
トマト	萎ちょう病の新レース	Fusarium oxysporum f.sp. lycopersici race J2	下位葉の黄化・萎ちょう
メロン	つる割病	Fusarium oxysporum f.sp. Melonis の新系統	株の黄化・萎ちょう枯死
アスパラガス	炭そ病	Colletotrichum gloeosporioides	茎枯れ
ヤマノイモ	根腐病	Rhizoctonia solani	根部に黒褐色水浸状病斑
キク	軟腐病	Erwinia chrysanthemi	茎部の軟腐症状
	斑点細菌病	Pseudomonas cichorii	葉の黒点・葉縁の黒腐れ
トウモロコシ	ムギウスイロアブラムシ	Metopolohium dirhodum	吸汁による葉の褐点
テンサイ	マメクロアブラムシ	Aphis fabae	花茎先端付近を吸汁
ニンジン	ニンジンフタオアブラムシ	Cavariella aegopodii	未展開葉や若い葉を吸汁
アスパラガス	モモアカアブラムシ	Myzus persicae	茎上部や葉を吸汁
ピーマン	シクラメンホコリダニ	Phytonemus pallidus	新葉の縮葉・奇形
メロン	サカモリコイタダニ	Oribatula sakamorii	果皮に群生し品質低下
ステビア	オンシツコナジラミ	Irialeurodes vaporariorum	葉がスス症状となり黒変
トルコギキョウ	キタネコブセンチュウ	Meloidogyne hapla	生育の不揃いや蕾の奇形
シクラメン	キンケクチフトゾウムシ	Otiorhynchus sulcatus	根および球根部の食害
アスター、エリロゲン ヒナギク、ユウゼンギク	ヨメナスジハモグリバエ	Liriomyza asterivola	葉の食害
シバザクラ(フロクス)	ナミクキセンチュウ	Ditylenchus dipsaci	地上部の葉枯れ症状および枯死